

# たのしい たのしい 船穂校 ♪

倉敷市立船穂小学校

## 祖父の倉敷物語

わたしは、旧吉備郡池田村に生まれた。楨谷川ぞいに狭量な農地があり、そのほとんどは山林である。江戸時代に備前池田藩の藩有林だった山林は、村有林となり、総社市と合併した後は財産区が管理している。

祖父は、昭和24年に亡くなっていて、わたしは祖父の顔を知らない。和算が得意だったとか、鉄砲で猟をしていたとか、川で腕ほどの太さのうなぎをつかまえたなど、わたしが18歳の時まで生きた祖母から聞いた話ぐらしいしか祖父のことを知らない。

わが家は、田が2反、畑が1反、山林が2町と、とても裕福とはいえない農家だったが、祖父は村有林（共有林）で炭を焼き、薪を作っていた。炭や薪ができると大八車に満載して倉敷の燃料店に売りに行く。総社にも燃料店があっただろうが、倉敷まで運んで行った方が引き取り価格がよかつたらしい。朝まだ暗いうちから大八車を引いて倉敷に向かう。30キロは優にある道のりなのでさぞや大変だったろうと思う。倉敷に着くと燃料店に卸して対価を受け取る。そして、祖父は駅前の居酒屋でしこたま酒を飲んだ。そして、夜遅くに大八車を引いて家路に着いた。酔いがまわっていたせいか眠気のせいか、家の近くの谷川に大八車ごと転落した。谷川の中から、祖母に助けを求めている。

わたしは、近所のおじさんたちからこの話を何度も聞かされた。祖母は大変おとなしくやさしい人で、わたしは叱られた覚えがない。きっと、その時も「あれ、まあ、あんた、大丈夫かな。」などとゆるゆると話しかけたに違いない。

昭和30年前後まで、家庭用の燃料の多くは薪炭で、現在では考えられないほどの価格で取引されていた。大八車一車がいかにほどになったのか、対価のすべてを飲んでしまったのか、いくばくかは祖母に渡したのかはわからない。ただ、居酒屋で酒を飲めることに心踊らせながら30キロ余りの道のりを大八車を引いている祖父の姿を思うと微笑ましく思える。

高度経済成長とともに、家庭用の燃料は炭と薪から石油に代わり、需要を失った炭と薪はしだいに作られなくなった。今、家の周囲の山林は、伐採しなくなって何十年にもなり、ナラやシイの大木が鬱蒼と繁っている。ナラやシイは伐採しても、切り株からひこばえが生えて、二十年もすれば炭や薪の材料になるけれども、伐採されなくなった木々は繁るに任せている。森林が経済的な意味をなさなくなり、村の人たちは、工場や商店に勤めるようになった。田は、営農組合が稲を作付しているが、緩傾斜地の畑は何も作付されていないばかりが、原野や山林になっている。

旧池田村郷の内地区の耕地面積は、平石地区と鶏尾地区を合わせた程度はあるし、緩傾斜の畑は花崗岩風化土で水はけがよい。東向き、南向きに傾斜しており、斜度は平石地区と鶏尾地区よりも緩い。野菜や果樹栽培の適地といえるが、畑作に目を向ける農家はない。子どもころに13軒あったが、今は6軒である。周囲の畑はイノシシが跋扈し、所構わず掘り返して大変なことになっている。自然条件としては、大きく劣ってるとは思えないのに、マスカットとスイートピーの産地として全国に名を馳せる平石地区と鶏尾地区とこれほどまでの差ができています。都市部に薪炭を供給し、現金収入を得ることができた地区の歴史が、畑作よりも賃金労働を選んだ結果がもたらした差なのだろうか。

休日には、イノシシよけのトタン板で囲った畑で野菜を作るのを趣味としているが、雑草で覆われた周囲の農地を眺めながら、船穂はすごいなあと思った。